「非独立」への道

――一九四〇年プエルトリコにおける大衆民主党の成立――

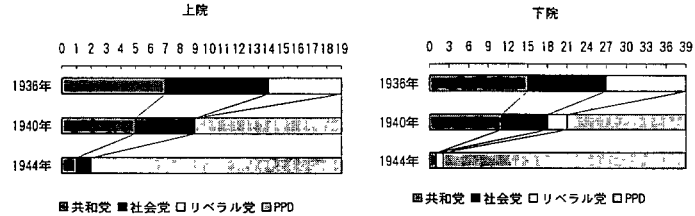
阿部小涼

はじめに

プエルトリコは現在アメリカ合州国領内にあって連邦には加入せず、国連の認可のもとに自治領として機能する、「自由連合州（Estado Libre Asociado／米国側での呼称はCommonwealth）」というステイタスを維持している。一八九八年「スペイン・キューバ・フィリピン・アメリカ戦争」の際の米国による軍事占領以来、同島は米国との関係性を絶つことなく自治権拡大をもくろむという独自の道を歩んできた。そのひとつの結節点は、一九五二年の自治法「自由連合州法」であり、これをもってプエルトリコは国連の「非自治領」を脱し、合州国の一連邦州でもなければ独立国でもないステイタスを確立するに至った。「民族自決＝独立」の路線とは異なるステイタスの在り方の萌芽として、本論文はその前史となる一九四〇年の選挙について考察する。

一九三八年プエルトリコに新政党が誕生した。後のプエルトリコ史を大きな変革へと導いたこの政党、「大衆民主党（Partido Popular Democràico：以下ＰＰＤと略記）」は、一九四〇年の島議会選挙で実質的勝利をおさめた。ＰＰＤの登場は、その名前に見られるような「大衆」をターゲットにした初めての政党となっただけでなく、それまでの島政治の対抗関係を一新する勢いを持っていた。表Ｉ-①、②に、一九三六年から四四年までの得票数ならびに議席数の変化を示す。二年後の四〇年には早くも三七・八％の得票率で第一党となったＰＰ

表1　プエルトリコ議会選挙（1936-44年）
①議席数の変化



②得票数の変化

	有権者数 a)	投票者数 b) *1	共和党 *2	社会党	リベラル党	PPD
1936年	764, 602	549, 500	152, 739	144, 249	252, 467	-
		(71 9%)	(27 8%)	(26 3%)	(45 9%)	-
1940年	714, 960	568, 851	134, 582	87, 841	130, 299	214, 857
		(79 6%)	(23 7%)	(15 4%)	(22 9%)	(37 8%)
1944年	719, 159	591, 978	101, 779	68, 107	38, 630	383, 280
		(82 3%)	(17 2%)	(11 5%)	(6 5%)	(64 7%)

*1 実際の投票者数、カッコ内は投票率[b/a]%。
*2 カッコ内は投票者数に占める割合。以下同様。
出典　Fernando Byrón Toro, *Elecciones y politicos de Puerto Rico*, pp 173-206, 348-349 より作成。

Dは、その後の四四年の選挙でも得票率六四・七%、上院では二議席を除く一七議席、下院でも二議席を除く三七議席を占めるという圧勝ぶりで、その後三六年間の長きに亙って島議会の政権を維持し、現在に続く一大勢力となった。その初代党首となったのがルイス・ムニョス・マリン（Luis Muñoz Marín 1898-1980）である。PPDの躍進に伴いムニョス・マリン自身は、四〇年に上院議長に就任、四八年には初の民選知事として四期一六年のあいだ知事の座に就いた。現在に至る島の政治的ステイタス「自由連合州」の生みの親として、さらに第二次大戦後に始まるプエルトリコ工業化の推進者として、彼の名前は広く島の人口に膾炙している。

ムニョス・マリンとPPDについては、その経済改革主義的側面やステイタス問題への寄与によって積極的に評価されてきた。[1] しかし他方では、島の失業問題や、米国へ流入した移民のアンダークラス化、米国の資本を導入した四〇年代後期以降の工業化や長期政権化したPPDの在り方が批判されてきた。[2] 近年では八〇年のムニョス・マリンの死後、文書館の整備もあって、史資料に触れることが可能になり、政治家の個人史として思想史的

作業の可能性も拓かれつつある。[3]

これらのＰＰＤとムニョス・マリンに纏わる問題群のなかでも重要な位置を占めるのは島のステイタス問題との関わりであろう。本論文はＰＰＤの原点ともいえる四〇年の選挙を問い直す試みである。ＰＰＤはいかなる経緯で誕生し、どの様に四〇年の勝利を手にしたのか。また「独立」に対する態度に焦点を当て、広く現在に至る歴史的コンテクストの中で「四〇年」は何を我々に提示しているのかを考察する。

一　「独立法案」の波紋

三〇年代のプエルトリコ政界では、共和党（Partido Republicano）、社会党（Partido Socialista）、リベラル党（Partido Liberal）の三大勢力が支配的であった。共和党と社会党は、合州国の一連邦州となることを望む「連邦加入派」という点で合意し、連合「コアリシオン（Coalición）」を形成して島議会の多数派を掌握していた。これに対抗するリベラル党は三〇年代に入って「独立派」を標榜するようになり、それと同時に米国ローズベルト政権との親密な関係を築きつつ、ニューディールの経済援助を利用した経済改革主義を全面に打ち出した。[4]

一方、プエルトリコ独立派のもう一翼を担ったナショナリスト党（Partido Nacionalista）は、三二年の選挙における低迷から選挙活動を停止し、ナショナリスト運動となった。米国支配に激しく抵抗したかれらは、三〇年代に入ってから警察との抗争を激化させ、三六年二月、米国人警察長官の暗殺事件を引き起こした。[5] これに対し三六年四月米国上院がプエルトリコへ突きつけたのが突然の独立法案であった。

この「タイディングス独立法案」は、プエルトリコで独立を問うレファレンダムの実施を要求する法案である。タイディングス連邦上院議員は当時「領土ならびに島嶼問題委員会」委員長を務め、この前年には一〇年後にフィリピンの独立を約束する「タイディングス＝マクダフィ法」を提出した人物でもあった。しかし、プエルトリコに対する法案では、結果が独立賛成であれば、四年という極端に短い移行期間を設けて年二五％ずつ関税を引き上げるという、経済的配慮を欠く内容を持っていた。同時期のフィリピン独立法に見られるような現実的論争を反映したものでも、島からの要請に応えるものでもな

かったのである。米国政府にとってこの法案提出は、三〇年代当時、島で起こったナショナリストの反米闘争に対する牽制と、プエルトリコ世論の沈静化を狙ったものであったことは、当時の内務長官ハロルド・イッキースの日記に明らかである。すなわちそれは、「独立」についてのイニシアティヴを与える一見民主的なポーズであり、法案の実現というよりは、提出自体を目的としていた。また、内務省の領土及び島嶼局長で、ニューディールの島への導入の窓口となっていたプエルトリコ復興局（Puerto Rican Reconstruction Administration: PRRA）の局長も兼任し、島の問題に精通したアーネスト・グリューニング（Ernest Henry Gruening）が法案作成に大きく関与していたことが、波紋を大きくした。彼は独立法案に際して島側の意見を傾聴する姿勢もなく、経済的に困難な法案であることも充分に認識していたからである。(6)

しかし、プエルトリコにとっては青天の霹靂ともいうべき突然の法案提出であり、政界に動揺を与え、この法案をめぐって様々な議論が噴出した。先述の「連邦加入派」のうち、社会党党首のサンティアゴ・イグレシアス（Santiago Igresias Pantin）は、この法案が「不条理で専横的」であると非難した。ところが共和党のナダル（Rafael Martínez Nadal）は、米国議会の頑迷な態度に、連邦加入がかなわないなら独立もやむを得ないとして、独立法案を支持するという混迷ぶりさえみせた。しかし三六年の選挙に際しては、共和・社会党は再度、連邦加入支持とコアリシオンの維持を確認し、政権の存続をはかった。(7)

「独立派」のリベラル党内部では、党主バルセロ（Antonio Barceló）が「たとえ飢えて死のうとも」独立すべきとの姿勢をとった。ところが、独立派を標榜しつつもニューディールを積極的に支持していたムニョス・マリンは、「米国は、プエルトリコが独立へ向けて経済的に自立できるように準備する責任があるはず。タイディングス独立法案はプエルトリコに独立をもたらすが、同時に人々を経済的困窮に縛り付ける」と、独立法案に反対する独立派という微妙な立場を採り、バルセロとの不協和音をみせた。(8) ムニョス・マリンはワシントンの官僚に積極的に独立法案の見直しを検討するよう覚え書きを提出する一方で、島のリベラル党においては三六年の選挙

戦への不参加戦略（Retraimiento）を展開しようとしていた。独立派の母胎であったリベラル党の選挙での敗北が、米国にとってはプエルトリコ住民の独立反対の意志表示とも映りかねないことを危惧したのである。[9] リベラル党を二分して争われたこの提案が一九三六年六月の党大会において敗北すると、ムニョス・マリンは「リベラル党左派」と呼ばれた自派閥を率いて党からの離脱を決意し三六年選挙での立候補を辞退した。

この三六年の選挙では、共和・社会コアリシオンの連邦加入派とリベラルの独立派という対抗図式は、表面的には温存されていた。しかし、米国からのニューディールの導入で中心的役割を果たし優勢であると目されたリベラル党が僅差で敗北し、独立法案をめぐる党の内部分裂が深刻なものであることが明白になった。

ムニョス・マリンのグループは三六年八月二八日、まず「社会独立派運動（Acción Social Independentista: ASI）」と名乗るグループを形成、三七年六月には「我々はプエルトリコ独立の種子である」と宣言して分離を表明し、新党結成準備に入った。そして三八年七月二二日「大衆民主党（Partido Popular Democratico）」を結成するに及んだのである。[10]

三八年一〇月、リベラル党では影響力の強かった党首バルセロが死亡し、サンティバーニェス（José Ramírez Santibáñez）が党首となった。この他にも三六年から次の四〇年選挙までの間は、プエルトリコ政界全体に、党首達の相次ぐ死去に伴う世代交替や、経済問題への対応の違いをめぐる対立などから、内部分裂が進行した時期となった。社会党は米国ＡＦＬと連携する労働組合ＦＬＴ（Federación Libre Trabajadores）を支持母体に持ち、労働条件の改善など経済改革を主張していた。しかし三二年以降は政権内にありながら、共和党との連合関係維持のためにその指導力を発揮できない状態にあった。三九年に創設者サンティアゴ・イグレシアスが死亡し、ボリーバル・パガン（Bolívar Pagán）がコアリシオン維持を継承すると、リベラ・マルティネス（Rivera Martinéz は分離して新たに「純正労働党（Partido Laborista Puro）: PLP」を結成した。一方共和党は、世紀転換期以降に伸張した糖業利害と結びつきながらその支持基盤を拡大してきた。しかし一九三四年に成立した米国の「砂糖割当法」により米国市場への自由な参入が

制限され、そのパイをめぐって米国系大資本に支えられた糖業と、現地の中小規模甘蔗プランターとの間に軋轢が生じると、後述するようにニューディールの農地改革を支持する層がリベラル（その後のＰＰＤ）支持へ流出するようになる。そのような中、選挙直前の四〇年七月、共和党ではスポークスマン的存在であったガルシア・メンデス（Miguel Angel García Méndez）が、それ以前から問題視していた社会党とのコアリシオン維持への反発と、ニューディールではなくむしろレッセ・フェール的な改革を主張して、選挙後まもなく死亡するナダルを離れて新たに「進歩的共和党（Partido Unión Republicana Progresista：PURP）」を結成した。ムニョス・マリンのリベラル党離党後、共和党も社会党も分裂し、新旧交代と同時に政界は再編成へと向かったのである。その結果、「コアリシオン」に対抗するため、リベラル党とＰＬＰ、ＰＵＲＰの三党は「三派統一党（Partido Unificación Tripartita：以下ＰＵＴと略記）」となった。それまでのリベラル党対共和・社会「コアリシオン」という対抗関係は解体し、「コアリシオン」、ＰＵＴ、ＰＰＤという三つの勢力の奇妙な対抗関係となって四〇年選挙を迎えることとなったのである。(11)

既存の政党の再編・連合のなかにあって、ＰＰＤは新進気鋭の政党として受け入れられる機会を得た。また三六年には選挙管理法が整備され、四〇年選挙では不正投票が抑えられたことも、買収資金を持たないＰＰＤに好都合な展開となった。(12) しかし何よりもＰＰＤの勝利を確実にしたのは、リベラル党左派から継承した経済改革主義と、既存の政党には見られなかった、一般大衆へ向けられたポプリスモ的なキャンペーンによる牽引力だったのである。

二　ＰＰＤの支持基盤

四〇年選挙の結果は表Ｉ－②のとおり、それぞれＰＰＤ二一万四八五七票（三七・八％）、共和党一三万四五八二票（二三・七％）、社会党八万七八四一票（一五・四％）、ＰＵＴ一三万〇二九九票（二二・九％）であった。共・社を併せた「コアリシオン」は三九・一％で、得票数のうえでは一・三％の僅差でＰＰＤを上回った。しかし議席数では、上院はＰＰＤ一〇議席、コアリシオン九議席、下院はコアリシオンとＰＰＤは同数の一八議

席を得て両者は伯仲した。下院の三議席を獲得したPUTはPPDに同調する方針を固めたので、上・下院ともにPPDは実質的な多数派となったのである。また三六年との比較から、各党の減少分がPPDへ流出したことが判る。なかでもリベラル党支持の大多数は事実上PPDが吸収した。このことは当選したPPDの議員のうち上・下院併せて六名が、もとリベラル党の議員であったことからも裏付けられる。

またPPDの出現は社会党の得票数の大幅な減少にも影響している。社会党は、労働者の権利保護を唱い、経済問題を重視した政党であったが、三〇年代の共和党との連合によって、その革新性を希薄にしていた。そのような中で経済改革を前面に押し出し、具体的な政策案を提示するPPDのキャンペーンが、従来社会党の票田となってきた労働者層に強く訴えたのである。一九四〇年七月二一日、選挙を目前にして首都サンファンの競技場で行われたPPDの党大会では、まず、他の政党との同盟・連合をしないことや、辺境の人々を直接代表する党であることが強調された。その後で、PPDが推進する具体的な政策案が提示されたが、そこには不在地主や大土地所有に対抗するための農地改革や農業労働者保護など、ニューディール期のリベラル左派の政策を継承する諸計画が示されていた。この様な政策案をうけて、社会党系の労働組合FLTを忌避して結成されたCGT(Confederación General Trabajadores)が、PPDの支持を決定したことも、PPDの勝因の一つとなったのである。[13]

図Ⅰ　PPDのシンボルマーク

出典：Byrón Toro, *Elecciones y politicos*, p. 192.

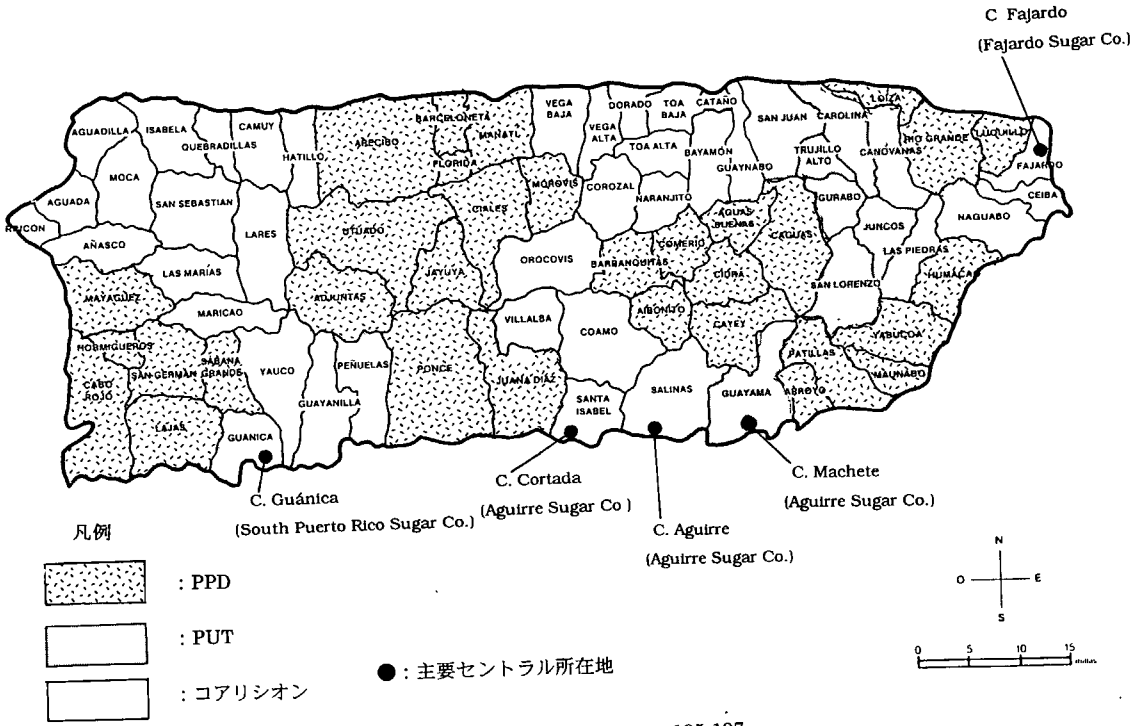
PPDのシンボルマークは、麦わら帽子「パバ(Pava)」をかぶる「ヒバロ（jíbaro)」の横顔であった（図Ⅰ)。ヒバロは、元来、都市と隔絶して生活したプエ

ルトリコの山間部に暮らす混血の貧農を意味した。しかしフォークロアや文学の題材として、徐々に半自給自足的生活をおこなうプエルトリコ民衆の象徴的存在となっていた。ムニョス・マリンもヒバロを最もプエルトリコ的な存在と捉えており、貧しくとも自分の家と畑をもち、豆と米の充分な食事をし、仕事の終わりには景気付けの一杯のラム酒と歌がある、それなりに満ち足りたヒバロの生活を、理想的に描写している。[14] このようなシンボルマークに一票を投じたのはどの様な人々だったのだろうか。PPDはスペイン植民地時代からの伝統的都市で、社会の上層階級の集中する首都サンファンでは議席を得ることが出来なかった。ここでは、プエルトリコの大半を占めた農村地域についてもう少し詳細に検討する。[15]

図Ⅱは下院の議席獲得地区を政党別に示したものである。また表Ⅱに下院選挙区のなかから、農村部の代表的な地域を採り上げ、その農地の特徴をまとめた。下院は選挙区について定員一名の議席を争うため、より地域的特徴が反映されやすい。まず対立する「コアリシオン」や共和党の勢力圏であった海岸部のファハルド（Fajardo）、グアニカ（Guánica）、サンタ・イサベル（Santa Isabel）、サリナス（Salinas）の四地区は、いずれも会社の経営管理による大規模甘蔗プランテーションと、甘蔗を輸出用の粗糖に加工する「セントラル」と呼ばれた製糖工場の存在する地域であった。特に総農場面積の九四・六％を甘蔗農場が占めるサンタ・イサベルでは、全農場数の三七・五％に相当する会社管理農場が、総農場面積の九九・六％を所有している。このようなプランテーションは、サンタ・イサベルで三七〇〇クエルダス、サリナスで四〇〇〇クエルダス（一クエルダは約〇・九七エーカー）という圧倒的な農場規模を誇っていた。これらの地域のセントラルはいずれも「四大会社」と呼ばれた米国系製糖業の所有であり、大規模プランテーションの解体を進めようとしたPPDと、米国資本を背景とした糖業利害との対立が鮮明に浮き彫りになっている。

一方、山間部の町バランキータ（Barranquitas）は、リベラル党支持からPPD支持に変化した典型的な地域である。農業構造の変化、特にコーヒー産業の縮小で打撃を受けたバランキータは、四〇年時点では、商品作物としてのコーヒー、タバコと、食料生産を相補的に行う複合的な農業形態を持つ地域であった。また土地所有形

図II　1940年選挙における下院議席の政党別分布



出典：*Census of 1940*, p.166; Byrón Toro, *Elecciones y Politicos*, pp.195-197
より作成。

態も自作農と借地農が全農場数，面積のほぼ全体を占め，農場平均規模も一〇クエルダス以下の零細規模の生産者が多かった。世紀転換期のリベラル党勢力の巨頭ムニョス・リベラの生誕地でもあったが，三八年のPPD結成以降は息子ムニョス・マリンの新政党の重要な拠点となったのである。

また海岸部の甘蔗生産地域においても，ルキージョ（Luquillo）のように，PPDが最初に支持を集めた地

表II　1940年下院選挙の結果と農村部の特徴

議席獲得政党	地区名	所有形態別分布1) 農場数［%］ 所有地	管理地	借地	農場面積［%］ 所有地	管理地	借地	農場平均規模［cuerdas］2) 所有地	管理地	借地	主要作物3)
PPD	バランキータ	59.0	0.1	40.9	66.7	2.5	30.8	19.3	509.9	12.8	C/T
	ルキージョ	85.7	2.3	12.0	37.8	54.0	8.2	24.9	1,322.8	38.4	A
	サン・ヘルマン	82.4	3.3	14.3	69.7	19.9	10.4	26.6	191.0	22.7	A/C
社会党	ファハルド	76.4	2.2	21.5	31.7	52.8	15.5	30.3	1,767.8	55.7	A
共和党	グアニカ	56.1	14.0	29.8	20.4	69.8	9.8	117.6	1,606.0	105.6	A
	サンタ・イサベル	50.0	37.5	12.5	0.2	99.6	0.2	5.9	3,731.0	22.0	A
PUT	サリナス	78.6	7.1	14.3	13.8	82.6	3.6	62.2	4,081.3	87.9	A

1)　農場の所有形態により「所有地（owner）」：地主（部分的借地も含む）が農場経営者，
「管理地（manager）」：会社による経営管理下の農場，
「借地（tenant）」：借地農場の3つに分類し，その全体に占める分布を示す．
2)　1農場あたりの平均規模．1クエルダ［cuerda］＝0.9712ヱーカー．
3)　A：甘蔗（Azucar）/C：コーヒー（Cafe）/T：煙草（Tabaco）
出典：*Census of 1940*, pp. 202-243.

域もあった。ここでは海岸の平野部に甘蔗栽培業者が多数存在し、隣接するファハルド（Fajardo）地区と比較すると、やや自作地が多く規模が小さいことがうかがえる。このルキージョ地区から当選したピニェーロ（Jesús T. Piñero）議員は、中小規模の甘蔗栽培者の団体「コロノ連盟（Asociación de Colonos）」の代表で、後に現地人では初めての（そして米国大統領による指名としては最後の）プエルトリコ知事となった人物でもある。それ以前は共和党支持層を成していた糖業利害の中で、現地資本を代表するコロノの支持の獲得は、PPDを躍進させる大きな要因となったのである。[16] 同じ東部地域のカリブ海側のウマカオ（Humacao）地区でもPPDは議席を得ている。この地区は、ニューディールの導入で実現した公営のセントラルと実験農場ラファイエット（Lafayette）があり、PPDの前身であるリベラル党左派の時代から、経済改革の恩恵を受けた地域であった。

以上のように「大衆」の名の下に集まったPPDの支持母体の一端は、(1)小規模、ないしは零細な農場で、商品作物と食料生産を複合的に行う山間部農民（元来の「ヒバロ」の姿に最も近い人々といえる）、(2)糖業部門のうち米国資本系の糖業と対立した、現地資本を担う中小規模の甘蔗栽培者、(3)ニューディールの農地改革の恩恵に浴した農民などに特徴づけられる。「ヒバロ」のシンボルは、PPDのキャンペーンの中で「プエルトリコ辺境の大衆」イメージへと拡大されていったのである。そのなかで、農村部の土地を持たない労働者もまた、PPDの重要な支持層を成していった。この様な人々は、いかにしてPPDのキャンペーンに動員されたのだろうか。

三　社会正義と独立

PPDのキャンペーンは、島の一般大衆へ直接語りかける草の根的な側面を持っていた。ムニョス・マリンは、夜間や日曜日を利用して開いた集会の場へ直接出向いては、ラフな服装で、難解な言葉を避け、生活に密着した言葉で、人々と膝を突き合わせて語り合ったという。また理念ではなく農地改革を中心とした具体的な政策を提案する。そのような農村の大衆に照準を合わせた「ポプリスモ」の手法が、PPDの特徴でもあった。[17]

PPDのメッセージを一層効果的に各地へ伝えたのは、キャンペーン新聞『エル・バテイ』である。「エル・バ

テイ」とは集会小屋を意味する、大衆の語らいの場の象徴で、ここで様々なメッセージやスローガンが繰り返し伝えられた。三九年四月には「投票とは搾取から身を守るための唯一の武器である。投票とはパン、土地、自由、正義を必要としているあなた達の政府にするために、あなたが持っている唯一の武器である」という、ムニョス・マリンの記名記事が掲載されている。[18] この記事の中で、選挙における住民の一票の重要性を説き、投票に纏わる金銭的授受を批判し、「家族と自分の土地を守るために」投票権を行使することの尊厳的意味を与えようとしている。農村部における民主的選挙の教化活動は、当初から大衆政党のキャンペーンの重要な一側面であったといえよう。

しかし二年間のキャンペーンの間に重要な変化が見られた。それが「独立」問題への対応である。三八年に結党して間もないPPDでは、その構成員の多くが、ムニョス・マリンを含めて、「独立派」であった。三九年初頭までは党のプログラムの一つでもあった独立支持は、しかし、キャンペーンを進める中で取り下げられているのである。[19] そして四〇年までには「ステイタスは次回の選挙では争点ではない」との方針が徹底的に喧伝されたのである。[20] 先述の四〇年の党大会でも、政策綱領の一つとしてステイタス問題については改めて住民投票を提案することを公約するにとどめ、またその際の選択肢として連邦加入も同様に挙げるなど、独立派的色彩を希薄化させていた。[21] スローガンはそのような経済重視の方針を反映して、「パン、土地、そして自由」を掲げた。さらにPPDの党員が「独立」を語ることは公私ともに禁じられた。ムニョス・マリンは、政治的な独立だけでは自由を得ることは出来ない。自由とはまず人間らしい生活をすること、それが保障されて初めて、独立は自由を意味するのだとの説得を行った。[22]

ステイタスを争点からはずすという徹底したキャンペーンは、経済改革を第一とする方針と表裏一体を成すものだった。それは、大衆政党として多様な支持層を開拓する際に、先述のコロノやCGTなど「連邦加入派」から転向したグループを包含していったこととも深く関わるものであろう。独立という抽象的なものではなく、貧困からの脱却という現実的な選択肢がPPDの勝因であった。

ところが、「今回の選挙では争点にしない」というメッセージは、完全に否定ではないだけに解釈の余地を残し、「その先の独立」へと期待感を喚起させる表現となった。また『エル・バティ』とともに配布されたムニョス・マリンによる『問答集（*Catecismo del Pueblo*）』には、独立による自治を称揚する一方、連邦加入に伴う経済的な負担などが示され、彼の非公式の独立志向を表現したものと解された。このほかにもキャンペーンに使用された様々なイメージは、彼らが「独立派」であることを象徴していた。シンボルとされたヒバロの絵に込められた「プエルトリコ的なもの」への愛着は、その一例である。またPPDのキャンペーン車から拡声器で繰り返し流されたのは、独立派のシンボルとして流布していたボレロの名曲『ラメント・ボリンカノ（*Lamento Borincano*）』であった。「ボリンカノ」とはスペイン支配以前の島の呼称であり、この曲は第二のプエルトリコ国歌といわれるほど、その民族としてのアイデンティティに強く訴えるものであった。また『エル・ヒバリート（*El jibarito*）』の別名でも知られ、当時の農村の貧困をリアルに描く歌でもあった。[23]

このようにしてPPDは、大衆党としての勝利と同時に、独立派としての矛盾を包含してしまった。米国側から突きつけられたタイディングス独立法案は、現実的な選択肢としての独立に疑念を抱かせた。その結果「社会正義」（即ち経済的な救済）と「独立の理想」は、プエルトリコにおいては両立の不可能なものとして語られるようになるのである。しかし四〇年の時点で、PPDは、未だ捨てられない理想として「独立」を抱え込んでしまった。PPDと独立派との共存が困難になるのは、独立派切り捨てが行われる四〇年代以降のことになる。

おわりに

一九五一年、自由連合州の成立を目前にしたムニョス・マリンは、山間部の町バランキータで演説し、「我々は国を愛する精神を独立と切り離しては考えられませんでした。独立以外のものはすべて、プエルトリコを愛する気持ちと相容れないように思えたのです。困難な過程は、一九三六年、タイディングス独立法案が提出されたときに始まりました。この法案は、一方で抽象的な愛国心から我々の多くが求めてきた分離独立を与えて

くれたでしょう。しかしもう一方では、それは人々を二度と脱出の望めないような極端な貧困へ追い込むものでした。タイディングス独立法案はプエルトリコを独立させたかもしれないが、人々を経済的貧困へと縛り付けるものでもあったでしょう」と訴えている。[24] PPDのその後の経過は、はじめに述べたように「非独立」のステイタスを確立していく歴史となる。しかし、この述懐に見られるように、その萌芽は、すでに「ステイタスは争点ではない」とした四〇年のキャンペーンに看取できるのである。

現代において独立問題とは「民族自決の尊厳」のみでは語ることのできない複雑な問題を提起する。その大きな要因が「経済問題」にあることは否定できない。大衆化する政治が、生活に密着したイシューを優先させ、経済優先主義によって独立の理想がトレードオフされる。島嶼の独立問題は、島嶼が本土へ突きつける植民地主義批判の矛先であるのみならず、本土が島嶼へ突きつける難題、さらには島嶼自身が抱え込んでしまう内なるディレンマでもある。そのことを、この四〇年の選挙は体現しているのである。

(1) Thomas Aitken, Jr., *Poet in the Fortress: The Story of Luis Muñoz Marín* (New York: The American Library of World Literature, 1964); David F. Ross, *The Long Uphill Path: A Historical Study of Puerto Rico's Program of Economic Development* (San Juan, Puerto Rico: Editorial Edil, 1969); Earl Parker Hanson, *Puerto Rico: Land of Wonders* (New York: Alfred A. Knopf, 1960).

(2) James L. Dietz, *Economic History of Puerto Rico: Institutional Change and Capitalist Development* (Princeton, New Jersey: Princeton Univ. Press, 1986).

(3) ムニョス・マリン財団によって設立された文書館(Fundación Luis Muñoz Marín, Archivos Luis Muñoz Marín: ALMM)は、首都サンファンから程近いトルヒージョ・アルトにあり、ムニョス・マリンの邸宅もそのままの形で残されている。また回想録の出版も進行中である。Luis Muñoz Marín, *Memorias: Autobiografía pública, 1898-1940* (San Juan, Puerto Rico: Universidad Interamericana de Puerto Rico, 1982); *Memorias: 1940-1952* (San German, Puerto Rico: Universidad Interamericana de Puerto Rico, 1992).

(4) 拙稿「ヌエボ・トラト(El Nuevo Trato)—プエルトリコにおけるニューディール」『アメリカ研究』三〇号

（一九九六年）を参照。

(5) Thomas Mathews, *Puerto Rican Politics and the New Deal* (Gainesville: University of Florida Press, 1960; rept. ed., New York: Da Capo Press, 1976), pp. 249-251.

(6) Harold L. Ickes, *The Secret Diary of Harold L. Ickes: The First Thousand Days, 1933-36* (New York: Simon & Schuster, 1953), pp. 547-548; Frank Otto Gatell, "Independence Rejected: Puerto Rico and the Tydings Bill of 1936," *Hispanic American Historical Review*, Vol. XXXXVIII (1958), pp. 25-44. なおフィリピンの独立問題は、中野聡「与えられた独立への道—独立法問題をめぐる米比関係史の研究（一九二四—四六）」（一橋大学博士学位論文）を参照。

(7) 「連邦加入がかなわないならば独立もありうる」というのは当時の連邦加入派のロジックでもあった。Gatell, "Independence Rejected," pp. 33-35, 42; *New York Times*, April 27, 1936, p. 8; Mathews, *Puerto Rican Politics*, pp. 256-258.

(8) *New York Times*, April 24, 1936, p. 1; Mathews, *Puerto Rican Politics*, pp. 255-257.

(9) ALMM, Sección 3, Serie 1, # 1-23; Muñoz Marín, *Memorias: 1898-1940*, p. 152-155.

(10) Robert W. Anderson, *Party Politics in Puerto Rico* (Stanford, California: Stanford University Press, 1965), p. 52.

(11) この時期の政界は「カウディリスモ（caudillismo: ボス支配）」といわれる、党首による強力な党支配が一般的で、党首の交代による離合集散は二〇年代にも見られた。また、世紀転換期に米国支配へと移って以後、留学の経験など米国の影響を色濃く受けた世代が政界で中心的な役割を果たすようになった点でも、四〇年前後の指導者の入れ替わりは、大きな意味を持つものであったといえよう。Anderson, *Party Politics*, p. 48; Fernando Byrón Toro, *Elecciones y politicos de Puerto Rico* (Mayagüez, Puerto Rico: Editorial Isla, 1977), pp. 191-194.

(12) *Cong. Rec.*, 74 th Cong., 2 d Sess., April 23, 1936, pp. 5925-5927.

(13) *El Mundo*, Lunes, 22 de julio de 1940, p. 6; Aitken, Jr., *Poet in the Fortress*, pp. 134-135.

(14) Luis Muñoz Marín, "The Sad Case of Puerto Rico," *The American Mercury*, (February 1929), pp. 136-141. ムニョスについては、同時期の研究調査によって実態として把握され、「再発見」されている。José C. Rosario, *The Development of the Puerto Rican Jíbaro and his Attitude toward Society* (Rio Piedras, Puerto Rico: University of Puerto Rico, 1935).

(15) プエルトリコにおける島議会議員の選挙は四年に一度、総ての議席について争われる。上院は七地区から二名ずつと、比例代表五名の計一九議席、下院は三五地区から各一

名ずつと、比例代表四名の計三九名から構成される。プエルトリコ議会の変遷については、Byrón Toro, *Elecciones y políticos*; Henry Wells (General Editor), *Puerto Rico Election Fact Book* (Washington, D. C.: Institute for the Comparative Study of Political Systems, 1968) を、政党史として、Anderson, *Party Politics* を参照。また統計資料として、U. S. Department of Commerce, Bureau of Census, *Sixteenth Census of the United States: 1940, Agriculture, Territories and Possessions* (Washington D. C.: GPO, 1943) を、法制度の資料として、Office of Commonwealth of Puerto Rico (OCPR), *Documents on the Constitutional History of Puerto Rico* (Washington, D. C.: Office of Commonwealth of Puerto Rico, 1964) を利用した。PPD勢力の弱い地域には共通性が見えにくいが、一九世紀以来コーヒー生産によって繁栄した北西部地域において反PPD傾向がみられる。原因としてはアンダーソンによる四〇年代以降の研究が、地元「カシーケ(Cacique)」(地域のボス)の影響力との関連を指摘している。コーヒー生産の中心地ラレス(Lares)は、一九世紀のスペインからの独立革命「ラレスの叫び(El grito de Lares)」事件で有名である。コーヒー産業とリベラル党勢力の関連についても再考される必要があろう。Anderson, *Party Politics*, pp. 36-42.

(16) Muñoz Marín, *Memorias: 1898-1940*, p. 173. 三〇年代の政治的変化とプエルトリコ糖業との関連については、別途論考を予定している。

(17) Aitken, Jr., *Poet in the Fortress*, pp. 134-135; Hanson, *Puerto Rico*, pp. 122-124.

(18) Luis Muñoz Marín, 'Su voto es su arma,' *El Batey*, Primera Quinsena de abril de 1939, pp. 1-2, ALMM, Sección 5, Serie 7-11.

(19) Muñoz Marín, *Memorias: 1898-1940*, pp. 186-187.

(20) "El status político no esta en 'issue,'" *El Batey*, Octubre de 1940, ALMM, Sección 5, Serie 7, # 11.

(21) *New York Tmes*, July 22, 1940, p. 8; Anderson, *Party Politics*, pp. 54-55.

(22) Aitken Jr., *Poet in the Fortress*, pp. 127-128.

(23) Muñoz Marín, *Memorias: 1898-1940*, p. 179; Ruth Grasser, *My Music is My Flag: Puerto Rican Musicians and their New York Communities 1917-1940* (Berkeley: University of California Press, 1995), pp. 201-202; Anderson, *Party Politics*, pp. 54-55.

(24) Luis Muñoz Marín, "Desarrollo del Pensamiento político sobre el status," Discurso pronunciado por Luis Muñoz Marín, el Dia de Muñoz Rivera, 17 de julio de 1951, Barranquitas, Puerto Rico, ALMM, Sección 5, Serie 11.

(東京大学教養学部付属アメリカ研究資料センター助手)